

雨よけで高品質期待

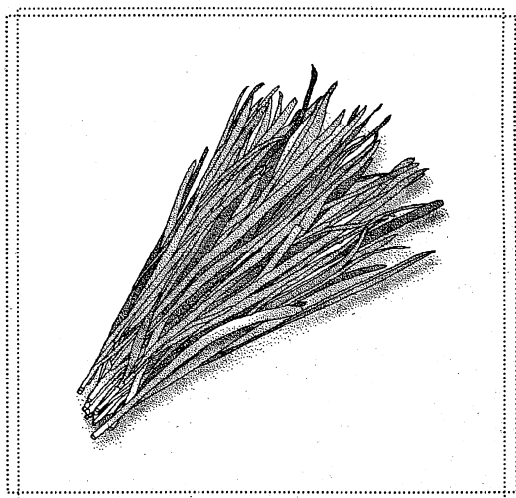
—— 鮫島 國親



一度植えると数年間収穫が楽しめる多年生の緑黄色野菜です。独特の風味があり、ビタミンA・B₂等を豊富に含み、肉や魚の臭みを消す働きを持っていることから、レバニラいためやギョーザの具などに広く利用されています。庭先やプランターで手軽に作れ、株分けもできます。近年は専作的な周年栽培も行われています。今回は高品質が期待できる夏どりの雨よけ栽培を紹介します。

発芽適温、生育適温ともに20度で、5度以下では生育を停止します。連作障害は出にくく、土壌の乾燥に強いですが、過湿に弱く、酸性土壌を嫌います。夏に白い花が咲き、晩秋から初冬に生育が止まり、春再び生育を開始します。春にまくと翌年から、秋にまくと翌々年から収穫できます。

春まきでは地温を高めるためハウスやトンネル内で苗床青首もしくはセル成型苗育苗（448穴トレイ、一穴三粒）を行います。苗床には種まきの10日前に1平方メートル当たり苦土石灰150グラム、堆肥4キログラム、化学肥料100グラム（三要素15%の場合）を目安として施します。床幅は1メートルとし、10センチ間隔にすじまきします。



種まき後、かん水、マルチを行い、発芽後除去します。育苗中は5-30度で管理し、週1回程度かん水します。早めに株間2センチに間引き、本葉二枚展開後、追肥（2回）を行いましょう。本ぼには基肥として苗床と同程度の肥料を施し、9月以降10日おきに3回化学肥料を追肥（20グラム/1回）します。

育苗日数は苗床育苗の場合で90日（草丈25センチ）、セル成型苗育苗で50日（草丈15センチ）くらいです。本ぼの栽植密度は雨よけ施設の大きさに合わせますが、うね幅2メートル（床幅150センチ）、株間25センチ、四条（条間40センチ）で一穴5-6本植えを目安とします。

花茎は開花前に切り取ります。約1年間の株養成後、翌年の4月ごろ雨よけ・刈り揃えを行い、新たに伸びてきた茎葉を5月ごろ草丈35センチで収穫します。収穫後追肥（20グラム）・かん水を行い、その後再び伸びてくる茎葉を順次収穫します。

（鹿児島県農業開発総合センター副所長）

平成20年3月13日（木）／南日本新聞